

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：32607

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13947

研究課題名（和文）縦断研究・群間比較による高齢者の老化に対する心理的葛藤の発生と解消プロセスの解明

研究課題名（英文）A longitudinal comparative study on the acceptance of aging and self-reliance during the aging process in elderly people

研究代表者

深瀬 裕子 (Fukase, Yuko)

北里大学・医療衛生学部・准教授

研究者番号：80632819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：老化の過程で生じる「老いの自覚」と「自立の希求」による心理的葛藤について、量的データによって心理的健康との関連を検証し、投影法によって心理的葛藤の測定を試みた。その結果、前期高齢者は自立の希求が心理的健康に関連するが老いの自覚は否定的に影響することが示唆された。また、後期高齢者は、身体的にも社会的にも老化を実感する場面が多くなるため、自立の希求の心理的健康への効果が失われる可能性が示された。投影法による評価は、評定者間一致率は認められたものの妥当性にはさらなる検証が必要であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の知見は、先行研究で示唆されている、老いの受容が高齢者全般に有効であるという考え方に一石を投じるものであり、高齢者への心理的支援において自立の感覚を強化すべきか、老いへの再適応を促すべきかの指標となることが期待される。また、投影法の評価については、国外の評価マニュアルを応用して日本では初めて数量的に検討した研究であり、高齢者臨床のみならず、今後の臨床場面への活用に寄与するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the relationship between acceptance of aging, self-reliance, and psychological adjustment in elderly people using quantitative analysis and evaluated their level of acceptance of aging and self-reliance through a projective test. The study results indicated that self-reliance was positively related to psychological adjustment, whereas acceptance of aging was negatively related to psychological adjustment in elderly people aged 65 - 74 years; moreover, no relationship prevailed between acceptance of aging, self-reliance, and psychological adjustment in elderly people aged over 75 years. Therefore, the acceptance of aging may be crucial for elderly people with physical disabilities and several restrictions. Regarding the evaluation using a projective test, some limitation related to the evaluation criteria in Japanese existed, although the inter-rater reliability was confirmed.

研究分野：高齢者心理学

キーワード：老いの受容 老いの自覚 自立の喪失 独立性 心理的自律性 精神的健康 縦断研究 比較研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の高齢者心理学では、身体的老化や社会的喪失に抵抗し、自立した状態を維持することを目指す研究が中心であった。しかし、身体的老化や社会的喪失は誰もが経験する正常な老化であり、身体的・社会的老化を拒否するだけでは、正常な老化を経験した際に老化に対する心理的葛藤が解消できず、心理的健康が低下する可能性があると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 老化の過程において老いの再適応が心理的健康の維持に果たす役割の検証

本研究の目的の中核は、老化に対する心理的葛藤を解消するための適応方略の一つである「老いへの再適応」の働きを明らかにすることである。老いへの再適応とは、自分の老化をありのままに自覚して建設的に対処しようとすることであり、適応方略の中でも変化しうる点に特徴がある。正常な老化の過程では、老いの自覚と自立の希求が心理的葛藤を引き起こすが、老いへの再適応をすることでこの心理的葛藤を解消できる可能性が報告されている。ただし、老いへの再適応は国外で施設入所高齢者を対象に質的な検討が行われ始めたところであり、質問紙調査による量的データでの検証や、臨床場面での活用を想定して投影法による検討が求められる。

そこで本研究では、縦断調査によって身体、社会的機能などの老化の過程を追跡し、自立の希求である「独立性」と、老いを自覚して新しい自分に適応する「老いへの再適応」という2つの指標を用いて、これらの心理的要因が心理的健康の維持に果たす役割を検証する。

(2) 投影法による老化の過程における心理的葛藤の測定の試み

老化の過程で生じる心理的葛藤について、質問紙調査に加えて投影法による評価を試み、臨床場面での活用を検討する。投影法検査として本研究では主題統覚検査 (Thematic Apperception Test : TAT) に着目した。TAT は、現実場面に近い心理的葛藤を測定できること (鈴木, 1997)、実施や分析が他の投影法検査よりも簡便であること、既存の評価システムである Defense Mechanism Manual (DMM) (Cramer, 1991, 2006) を援用することで妥当性のある評価が期待できることから適切だと考えた。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

本調査は高齢者群と対照群である大学生群の比較研究であり、両群とも5年間の縦断調査を行った。高齢者群は2015年から2019年まで毎年1回調査を行った。大学生群は2016年から2020年まで毎年1回調査を行った。両群とも大学の研究室で個別に調査を行った。ただし大学生群は最終調査を予定していた2020年3月にCOVID-19感染症が拡大し始めたため、一部の調査項目を除外してオンライン調査に変更した。

(2) 調査対象者

高齢者群は、2015年にシルバー人材センターに登録していた65歳以上の男女で、認知症の診断のない者を対象に募集した。2015年の初回調査には58人が参加し (平均年齢 = 71.53, SD = 4.62)、そのうち29人が5回すべての調査に参加した。

大学生群は、2016年に某大学1年に在籍していた者を対象に募集した。2016年の初回調査には60人が参加し (平均年齢 18.47, SD = 0.60)、そのうち31人が4回目までの調査に、27人が5回すべての調査に参加した。

(3) 調査項目と評価方法

基本属性

年齢、性別、家族構成などについて回答を求めた。

心理的自律性尺度

老いへの再適応尺度(3項目)と独立性尺度(6項目)の2下位尺度で構成されている (Fukase, Murayama, & Tagaya, 2018)。

身体機能

身体および社会的機能の老化を測定するため、握力と手段的日常生活動作 (Instrumental Activities of Daily Living : IADL) を測定した。

TAT

TATは8枚のカードを用いた (カード1, 2, 3BM, 6BM, 10, 12BG, 14, 16)。反応内容はICレコーダーで録音し、後日、テキストデータに起こした。得られたテキストデータに対してDMMを基に臨床心理士と臨床心理学を専攻する大学院生の2人が独立して評価した。

DMM は面接や TAT 物語などの語りデータに適用し、3 つの防衛機制（否認、投影、同一視）の得点を算出する方法である (Cramer, 1991, 2006)。主に米国のサンプルを対象に開発され、複数の研究で妥当性が示されているが (Cramer, 2017; Hibbard & Porcerelli, 1998; Porcerelli, Cogan, Kamoo, & Miller, 2010)、わが国の TAT 物語を対象にした分析は事例研究にとどまる (西河, 2010)。本研究では原著の英語マニュアルを日本語に訳して使用した。

その他の変数

生活満足度尺度 (Life Satisfaction Index-K: LSIK-J)、パーソナリティ尺度、抑うつ尺度、不安尺度などを測定した。

(4) 倫理的配慮

研究対象者には文書と口頭で研究内容を説明し、研究参加は自由意志であり、参加・不参加によって不利益が生じないことを伝え、同意書の署名をもって研究参加への同意を得た。本研究は北里大学医療衛生学部研究倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号 2015-021, 2016-001)。

4. 研究成果

(1) 老化の過程において老いの再適応が心理的健康の維持に果たす役割の検証

縦断調査の過程での測定値の変化

5 年間の縦断調査の過程での心理的自律性尺度や握力、IADL などの測定値に変化が認められるかを検証したが、いずれも直線的な低下は認められなかった。調査に参加し続けることができる、心身ともに健康な高齢者が分析対象であった可能性がある。したがって、縦断データではなく、横断データによって引き続き検証を行った。

心理的自律性が心理的健康の維持に果たす役割の検証

横断調査の結果、図 1 に示したとおり、老いへの再適応が必ずしもすべての高齢者にとって有効ではない可能性が示唆された。すなわち、前期高齢者 (Younger elderly) では、独立性 (Self-reliance) が生活満足度 (LSIK-J) の維持に重要で、老いへの再適応 (Acceptance of aging) は否定的な影響を与えていた。後期高齢者 (Older elderly) では、老いへの再適応も独立性も生活満足度に有意な影響を与えていなかった。前期高齢者の場合、身体的にも社会的にも高い水準を維持していることが多く、自らの老いを自覚することは自信の喪失につながりやすいものと推測される。一方、後期高齢者は、身体的にも社会的にも老化を実感する場面が多くなるため、独立性の効果が失われたものと推察された。

本研究の知見は高齢者への心理的支援において独立性の感覚を強化すべきか、老いへの再適応を促すべきかの指標となることが期待される。今後は、加齢とともに低下する身体機能や社会的機能との関連についても検証する必要がある。

(2) 投影法による老化の過程における心理的葛藤の測定の試み

まず、高齢者の TAT に対する 2 人の評価者の評価について 係数を算出したところ 0.631-0.851 であり一致率は良好だった。ただし、各防衛機制をカテゴリ別にみると一部のカテゴリで = 0.139, 0.313 と低い一致率であった。いずれもマニュアルの指示が曖昧であることが一因と考えられ、日本人あるいは日本人高齢者の一般的な TAT 物語をもとにマニュアルの修正をする必要があると考えられた。

次に、他の変数との関連を検討した結果、DMM による防衛機制とパーソナリティ、抑うつ、不安に関連は認められなかった。Cramer (2003) は、防衛機制とパーソナリティのうち外向性、開放性、情緒不安定性が関連したことを報告していた。ただし、この研究では調査対象者の年齢が 20~90 歳と大きな幅があり、一般化には限界がある。また、本研究では、パーソナリティ、抑うつ、不安を質問紙法によって測定したが、そもそも TAT をはじめとした投影法は対象者の自由な反応に無意識的なパーソナリティが反映されていると考える。そのため、質問紙法とは測定して

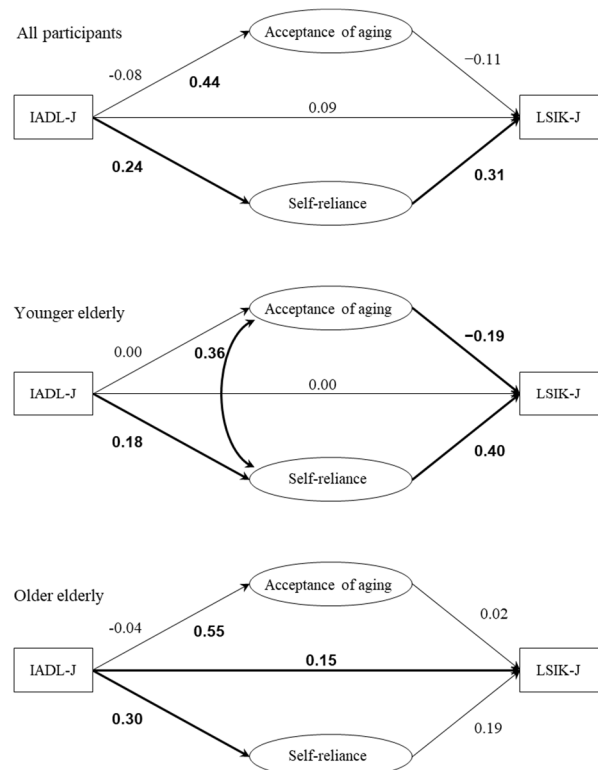


図 1. 共分散構造分析の結果 (Fukase, Murayama, & Tagaya, 2018)。年代による多母集団同時解析を行った。有意だったパスを太字および太線で記した。

いるパーソナリティの領域が異なる可能性があることも、関連が認められなかった一因であろう。今後は面接法などで妥当性の検証が必要だと考えられた。

以上のとおり、TATをDMMで評価し、得られた防衛機制によって老化の過程における心理的葛藤を検証することを当初の目的としていたが、DMMで評価した結果、日本人のTATにDMMを援用する際には、マニュアルの見直しと、妥当性の検証が必要であることが示された。

引用文献

- Cramer, P. (1991). Anger and the use of defense mechanisms in college students. *Journal of Personality*, 59(1), 39-55.
- Cramer, P. (2003). Personality change in later adulthood is predicted by defense mechanism use in early adulthood. *Journal of research in personality*, 37(1), 76-104.
- Cramer, P. (2006). *Protecting the self: Defense mechanisms in action*: Guilford Press.
- Cramer, P. (2017). Defense Mechanism Card Pull in TAT Stories. *Journal of Personality Assessment*, 99(1), 15-24.
- Cramer, P. (2017). Using the TAT to assess the relation between gender identity and the use of defense mechanisms. *Journal of Personality Assessment*, 99(3), 265-274.
- Fukase, Y., Murayama, N., & Tagaya, H. (2018). The role of psychological autonomy in the acceptance of ageing among community-dwelling elderly. *Psychogeriatrics*, 18(6), 439-445.
- Hibbard, S., & Porcerelli, J. (1998). Further validation for the Cramer Defense Mechanism Manual. *Journal of Personality Assessment*, 70(3), 460-483.
- Porcerelli, J. H., Cogan, R., Kamoo, R., & Miller, K. (2010). Convergent validity of the Defense Mechanisms Manual and the Defensive Functioning Scale. *Journal of Personality Assessment*, 92(5), 432-438.
- 西河正行. (2010). Thematic Apperception Test (主題統覚検査) 解釈の実際 (I): 要求-圧力分析, かかわり分析, 防衛機制マニュアル, 社会的認知と対象関係尺度, 中核葛藤関係テーマ法の観点から. *大妻女子大学人間関係学部紀要*, 12, 187-205.
- 鈴木睦夫. (1997). *TATの世界: 物語分析の実際*. 誠信書房.

謝辞 北里大学大学院医療系研究科修了生の寄川兼汰さん, 梅原沙織さん, 大木弘美さん, 安田凌さんには調査, データ整理, 分析にご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 深瀬裕子・上出直人・村上 健・市倉加奈子・村瀬華子・坂本美喜・柴 喜崇・田ヶ谷浩邦	4. 巻 43
2. 論文標題 地域在住高齢者の抑うつと客観的および主観的評価による口腔機能との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yuko Fukase, Kanako Ichikura, Hanako Murase, Hirokuni Tagaya	4. 巻 21
2. 論文標題 Depression, risk factors, and coping strategies in the context of social dislocations resulting from the second wave of COVID-19 in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12888-021-03047-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yuko Fukase, Naoto Kamide, Norio Murayama, Akie Kawamura, Kanako Ichikura, Yoshitaka Shiba, Hirokuni Tagaya	4. 巻 21
2. 論文標題 The influence of ageism on stereotypical attitudes among allied health students in Japan: a group comparison design	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12909-020-02439-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Arai S, Fukase Y, Okii A, Suzukamo Y, & Suga T.	4. 巻 19:280
2. 論文標題 Selection process for botulinum toxin injections in patients with chronic-stage hemiplegic stroke: a qualitative study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BMC Medical Informatics and Decision Making	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12911-019-1003-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fukase Y, Murayama N, & Tagaya, H.	4. 巻 18
2. 論文標題 The role of psychological autonomy in acceptance of ageing in the community-dwelling elderly	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Psychogeriatrics	6. 最初と最後の頁 439-445
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/psyg.12361	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寄川兼汰・深瀬裕子・松永祐輔・村山憲男・田ヶ谷浩邦	4. 巻 6
2. 論文標題 高齢者におけるTAT図版の深刻さの知覚と心理状態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北里大学附属臨床心理相談センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 FUKASE, Y., UMEHARA, S., YASUDA, R., & OHKI, H.
2. 発表標題 Thematic Apperception Test coding using the Defense Mechanism Manual to predict cognitive functions
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深瀬裕子・市倉加奈子・村瀬華子・田ヶ谷浩邦
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染拡大下においてなぜ高齢者の精神的健康は維持されるのか：オンライン調査による成人前期および中年期との比較
3. 学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深瀬裕子・上出直人・安田 凌・大木弘美・梅原沙織・市倉加奈子・坂本美喜・佐藤春彦・柴 喜崇・田ヶ谷浩邦
2. 発表標題 自立高齢者の抑うつと客観的および主観的口腔機能との関連
3. 学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fukase, Y., Ohki, H., Suzukamo, Y., Ichikura, K., Murayama, N., Inoue, M., & Tagaya, H.
2. 発表標題 Association of acceptance of aging and self-reliance with the mental health of the elderly
3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深瀬裕子・寄川兼汰・市倉加奈子・松永祐輔・村山憲男
2. 発表標題 Cramer Defense Mechanism Manualを用いた主題統覚検査 (TAT) の分析
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福川康之 (司会・指定討論者) 増井幸恵・西田裕紀子・山崎幸子・深瀬裕子 (話題提供) 佐久間尚子 (指定討論)
2. 発表標題 シンポジウム 老いを『嗜(たしな)む』~新しい高齢者観の創出に向けて
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深瀬裕子・寄川兼汰・松永祐輔・井上真里・金 泰希・市倉加奈子・田ヶ谷浩邦
2. 発表標題 高齢者を対象にした自律性尺度の併存的妥当性および再検査信頼性
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深瀬裕子・寄川兼汰・松永祐輔・村山憲男
2. 発表標題 高齢者におけるThematic Apperception Testの物語の特徴
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fukase, Y., Yorikawa, K., Matsunaga, Y., Murayama, N., & Tagaya, H.
2. 発表標題 Thematic Apperception Test is acceptable assessment tool for personality of the community-dwelling elderly, though some characteristics of the stories were different from that of undergraduate students
3. 学会等名 29th International Congress of Applied Psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深瀬裕子・寄川兼汰・松永祐輔・村山憲男・田ヶ谷浩邦
2. 発表標題 TAT (主題統覚検査) における地域在住高齢者の抑うつ指標
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寄川兼汰・深瀬裕子・松永祐輔・村山恵男・田ヶ谷浩邦
2. 発表標題 地域在住高齢者におけるTAT card 3BMを用いた防衛機制
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fukase, Y., Murayama, N., & Tagaya, H.
2. 発表標題 The role of psychological autonomy with acceptance of aging in Japanese elderly
3. 学会等名 The 15th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 日本健康心理学会（編）深瀬裕子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 746
3. 書名 健康心理学事典	

1. 著者名 石田 弓・兒玉憲一・荒井佐和子・勝見吉彰・大中 章・林 智一・深瀬裕子・高田 純・信原孝司・渡辺 亘・岡本祐子・尾形明子・大塚泰正	4. 発行年 2018年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 222
3. 書名 教師教育講座 第11巻 教育相談 改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

深瀬裕子の研究ホームページ
<http://square.umin.ac.jp/fukase/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------